

# いわゆる『最盛期』にみる

## イギリス・マナーの流通機構

——「運搬賦役」を中心として——

近 藤 晃

### 一 序 説

二 イングランドにみるマナー体制の変遷と十三世紀

三 イギリス・マナーの運搬賦役

四 運搬賦役と「反動期」の所領経済

五 総 括

『商業資本は発端においては、それが支配しているのではない諸極間、およびそれが創造するのではない諸前提間の、媒介運動にすぎない。』

『資本制の社会の先行諸段階では商業が産業を支配するが、近代社会では逆である。商業はもちろん、諸共同体——その間でそれが営まれる——に多かれ少かれ反作用するであろう。商業は、享樂および生活維持を生産物の直接使用によりもむしろ販売に依存させることにより、生産をますます交換価値に従属させるであろう。かようにして商業は、古い諸関係を分解する。……とはいえ、この分解作用は、**生産的共同体の本性**に依存すること多大である。』

『商業および商業資本の発展は、いたるところで交換価値めあての生産を發展させ、その範囲を大きくし、それを多様化し、普遍化し、貨幣を世界貨幣に發展させる。だから商業は、当面する生産組織——その形態のあらゆる相違にも拘らず主として

いわゆる『最盛期』にみるイギリス・マナーの流通機構

使用価値を目ざすような生産組織——にたいし、いたるところで多かれ少かれ分解的な影響を及ぼす。だが、どの程度まで商業が旧生産様式の分解を生ぜしめるかは、さしあたり生産様式の堅固さと内的編制とに依存する。また、この分解過程がどんな結果を生ずるか、すなわち、どんな新たな生産様式が旧生産様式の代りに現われるかは、商業にはなく、旧生産様式そのものの性格に依存する。古代世界では、商業の影響および商人資本の発展はつねに奴隷経済に結果する。また出发点次第では、直接的生活維持手段の生産を目ざす家父長的奴隷制度が、剰余価値の生産を目ざすそれに転化するにすぎない。ところが近代世界では、それが資本制的生産様式に結果する。この点から、これらの結果そのものは、なお、商業資本の発展とは全く別の事情によつて条件づけられていた、ということになる〔K. Marx, Das Kapital. Bd. III, X X, S. 362—364. 長谷部文雄訳・「青木文庫版」第九分冊四六八—四七二頁。ゴチックは引用者のもの〕。

## 一 序 説

総じて、封建制から資本制への生産様式の歴史的推転の基礎過程は、封建的土地所有の解体過程の所産として封建的諸関係の内部から主体的に生成してくる自由な独立の小商品生産者層を歴史的媒介契機ないしは『必要な経過点』としつつ進行するものであり、資本主義はかかる独立II自由な小商品生産者層の自己分解——資本II賃労働関係の形成に結果すべき近代的兩極分解——を機軸としてのみ終局的に成立しようとする見解は、今日到達しえた経済史学の研究水準が齎らす一つの主要な成果である。そしてまた、右の資本主義発達史研究の上に示された分析視角は、とりわけ、資本主義を明かに世界史における一つの発展段階II『近代』を特徴づけ、他方では前期的諸社会〔IIアジア的・古代的・封建的〕から近代社会を峻別せしめるところの、資本制生産の支配的な社会構成として把握しその歴史の規定性を明確化しようとする問題意識から導かれたものであった。したがってまた、資本主義を商品II貨幣経済一般——当然こうした表現自体多くの曖昧さを含むのであるが——と等置して理解することにより、資本主義発達史の基

礎過程を初発において商業的・金融<sup>1)</sup>・高利貸の形態をとって成立した「資本」の蓄積と、それを可能にした商品流通の一般化過程として把握しようとするドイツ歴史学派的見解並びにヨーロッパ社会経済史学の伝統的見地にたいする鋭い排撃をも同時に果したのである。

(1) このような資本主義発達史研究について示された基礎視点は、古典の正当な継承と、それを基底として実証史学の豊富な研究成果の批判的摂取を果すことによりヨーロッパ諸国の近代化過程の比較史的考証を刻明に行ってきた我が国の西洋経済史研究によつて早くから確立されたものである。かかる研究的立場よりする秀れた経済史研究は既に数多く与えられているが、とりわけその鋭い展開を示すものとしてさしあたり次の主要な諸業績が挙げられねばならない。戸谷敏之「イギリス・ヨーロッパの研究」(昭和十三年法政大学「経苑」所収・昭和二十六年再版)、大塚久雄「近代欧州経済史序説」(上)、同「近代資本主義の系譜」、同「近代資本主義の起点」、高橋幸八郎「近代社会成立史論」、同「近代資本主義の成立」、同「市民革命の構造」、同「封建制から資本主義への移行——スウィーシー・ドブ両氏の論争に寄せて」(「経済研究」第二巻・第二号、Science & Society, Vol. XVI, No. 4, 1952: A Contribution to the Discussion, in: The Transition from Feudalism to Capitalism, A Symposium, 1955)、松田智雄「産業資本の生成」(大塚久雄編「資本主義の成立」河出書房版・経済学新大系XI「総説」、秦玄竜「イギリス・ヨーロッパの研究」等々。

こうした問題意識の形成が、我が国の経済史研究に一時期を劃したことは周知のとおりであるが、戦後漸く海外の研究成果閲覧への機会が再び与えられたとき、イギリスあるいはソヴィエトの経済史学界にあって、近年はほぼ同様な問題意識が全く別個の研究を経て成熟しつつあるという極めて興味深い事実に接することができたのである。イギリス経済史学については一九四六年マルクス主義経済学者として令名高きモリス・ドブ Maurice H. Dobb の問題作「資本主義発展の研究」(Studies in the Development of Capitalism) の上梓をみているのみならず、その周辺にはクリストファー・ヒル Christopher Hill、ロドニー・ヒルトン Rodney H. Hilton らの秀れた業績を見出すことができる。またソヴィエトでは、かのスターリン論文を契機としていわゆるドブ・ッシュ学派の一掃が行われた事実がさきに我が国にも紹介されたが(川久保公夫「封建社会に於る商品生産について」大阪市立大学「経済学雑誌」第二十九巻第一・二号)、E. A. コズミンスキー E. A. Kosminsky の近業では明かに如上の理論的立場がとられ、富農層(Кулак)の生成と分解が封建制から資本制への生産様式発展の歴史過程

程における中心的課題として位置づけられてゐる (E.A. Kosminsky. *The Evolution of Feudal Rent in England from the Xlth to the XVIIth Centuries. Past & Present, No.7, 1955*).

(2) 『私が近代資本主義といふのは中世における貨幣経済の復興とともに発展したところの資本主義を意味する』(J・ブレンターノ)といった代表的発言を有する俗流経済史学の伝統は、フランス社会経済史学の巨峰アンリ・セエ H. Sée によって示された近代資本主義観、すなわち『動産が主として鑄造貨幣という形をとって発展をとげたその日から生れた』ところの資本の根元的形態(商業的・金融的形態をとる資本)が後に現れる工業形態と『相競合している』関係こそ近代の資本主義社会の基本的特質を構成すべきものであり、かかる近代資本主義の成立を招来する必要要件たる資本の蓄積は、商業とくに中世以降に繁栄する大規模商業の所産であるとする見解(H. Sée *Les Origines de Capitalisme moderne. 1925*、土屋宗太郎・泉俊雄共訳「近代資本主義の起源」)とともに現代のヨーロッパ経済史学に抜き難く継承されている。このような所説にたいする総括的展望は、Dobb, op. cit. pp.5 seq. 京大近代史研究会訳「資本主義発展の研究」I 七頁以下および松田智雄前掲『総説』五一六頁の註(1)にそれぞれ手際よく示されている。

しかしながら、このような資本主義発達史において示された分析視角にたいして、近年、若干の批判的見解が提出され、殊にモリス・ドップにたいするアメリカの経済学者ポール・M・スウィージー P.M. Sweezy の批判的論文『封建制から資本制への移行 The Transition from Feudalism to Capitalism』<sup>3)</sup>の公表が国際的基盤において活潑な論争を惹起し東西の経済史家の耳目を集めたことは周知の事実である。また我が国においても幾つかの内在的批判が出されているが、何れの場合にもその主要な論争の焦点が、とりわけ、封建制から資本制への移行の過程において商業ないし商品流通の果す歴史的機能の把握の仕方如何に据えられた事実が指摘されるであろう。

この点については、ドップの場合にも基本的にはほぼ同一の見地がとられているとはいへ、とくに我が国においては大家久雄教授が精緻な理論的解明を与えておられる。<sup>6)</sup>いま就中封建制下における商業Ⅱ商人資本の法則性の把握に

ついで示された主たる論点を要すれば、おうよ次のように整理できるであろう。(一)商業Ⅱ高利貸資本という形態をとる資本制以前の資本形態すなわち『前期的資本』は「生産過程」を特徴的に欠除する。(二)その故に封建制の基礎過程にたいして単に外側から寄生することにより、その否定的契機たるよりはむしろそれ自体封建社会の構成的一部分として現われ、却って資本制生産の発展にまさに逆働すべき封建的諸規定〔領主的・共同体的強制〕をその利潤形成の前提要件とする。したがって、(三)その利潤Ⅱ利子の実態は主として封建的生産様式のもとに剰余労働の支配的形態として現われる封建地代の派生形態ないしその控除部分たる性質のものである。かくて、(四)こうした前期的資本によって媒介される商品流通が封建的土地所有の解体過程を促がしブルジョアの発展の前提として機能しうるか否かは、領主権の強度〔Ⅱ地代水準〕にすぐれてデイナーミッシュに表現される封建制の『堅固さと内的編制』が専ら決定するべきものであり、断じて商品流通それ自体の單純に創出するところではない。等々。<sup>7)</sup>

こうした理論構成にたいする批判的見解の主たる論点は、この種の見地が『資本主義の成立について、「前期的資本」と「中産的生産者」との対抗の理論が、不当に一般化され、拡大されて、一方では、生産者の階級分化―対抗關係を生産力説に置きかえるとともに、他方では、商業を常にネグリヂブルであるとする』<sup>8)</sup>ごとき傾向性を有し、とりわけ商業の果す進歩的役割を不当に無視する点には根本的な欠陥が指摘されねばならない、という主張にあるであろう。このような視角から、封建制解体期そして資本主義成立期に継起する歴史的・経済的諸問題における商業の位置づけをめぐり多くの論議が展開されてきたのであるが、その主要な特徴は、(一)商業と商人資本の発展は常に封建的土地所有にたいして破壊的に作用し、その解体のための推進的契機としての意義を担うものであること、(二)資本主義形成の基本線は問屋制前貸を契機とする商業資本から産業資本への範疇転化の過程として理解されるべきであること、等

を力説する点に求められるであらう。

(c) Science & Society. Vol. XIV, No. 2, 1950 などこの論争の全容は The Transition from Feudalism to Capitalism : A Symposium. 1955 に収録されている。その他、高橋幸八郎『封建制から資本主義への移行』論争について(『思想』三六一・三号一九五四年)参照。

(4) 矢口孝次郎『資本主義成立期の研究』(昭和二十七年)、白杉庄一郎『近世西洋経済史研究序説』(昭和二十五年)、同『資本主義成立史の原型』第一分冊(昭和二十七年)等。またこの種の見地よりするモノグラフィッシュな研究として、木谷勤『初期資本主義と問屋制工業』(『思想』三四四号一九五三年)が注目される。その他日本経済史の分野から与えられたものに榊西光速・加藤俊彦・大島清・大内力『日本における資本主義の発達』(昭和二十六年)、同『日本資本主義の成立』(昭和二十九年)等がある。

(5) 『封建的關係の溶解剤としての商業の作用は、著しかったが、それにも拘わらず商人資本は大部分、古い秩序への寄生者としてとどまった。そして、その自覚的な役割は、青年期を過ぎてのちは、保守的であり、革命的ではなかった。』(Dobb, op. cit. p. 89)

(6) この点、大塚久雄『所謂前期的資本なる範疇について』(同「近代資本主義の系譜」第一論文)および同「資本主義社会の形成」(弘文堂社会科学講座IV『近代社会の成立』所収)の論述をみよ。

(7) 前註参照。

(8) 河野健二『封建制と商業』(『思想』三二五号)二九頁。

(9) 前註(4)にみる諸論稿の主張をみよ。なお、大塚教授の理論構成がこのように特徴づけられることは必ずしも妥当でない。念のために付記しておくならば、『批判』と称して提出される諸説の幾つかが、単に商業・商品流通の発展が資本制生産成立のための必要な前提要件であることを力説するに留まった事実がここで想起されるべきである。しかしながら、問題はそこに終るのではなく、まさに、そこから始まっているのである。

以上にみる研究史の動向は、今日の経済史研究にたいして数々の貴重な示唆を与えるのであるが、それにもかかわ

らず、なお多くの問題に關しては一層実証的且つ具体的な研究を経て再び理論的考証の分野にその成果を投入してゆくという研究的操作に委ねられるべき必要性を強く要請しているのである。

かくて、本小論においては、とくに封建的土地所有ないし農奴制の解体を一義的に<sup>10)</sup>發達する商業ないし商業資本の破壊的作用の所産として把握を企てる流通主義的見解の存在を念頭におきながら、対象をイギリス農奴制Ⅱマナー体制發展の歴史過程に求めることにより、商品流通と農奴制とが如何なる対応關係を示したかという問題に接近してゆくことを当面の課題としたい。そしてこの場合、われわれの主たる分析の目標として、とりわけ商品市場との接觸により十三世紀にその『最盛期』<sup>11)</sup>を招来した巨大所領の形づくる生産物商品化の機構——さしあたりマナーの『流通機構』とよんでおく——が指定されるはずである。マナー体制のかかる側面はこれまで十分な具体性において検討されたとはいえず、またしばしば『商品經濟に巻き込まれる』といった何ほどの非論理的表現のもとに問題の核心が不当に蔽いかくされてきたといえよう。本稿は、この封建社会史的研究的盲点ともいふべき一つの局面をとりあげ、その実態を究明しつつそこに封建制崩壊期の基本問題解明の糸口を見出そうという一つのささやかな試みである。

(10) ここで行論にそなえる意味からこのような流通主義的見解を展開している二つの所説を簡単に紹介しておく。  
(イ) P・スウィージーの所説

スウィージーは前掲の論稿のなかでドップを批判しつつ次のような見解を述べている。すなわち、『封建制の決定的な特徴は、それが使用のための生産の組織である、という点にある。』ところが、長距離商業は『古い封建的な使用のための生産の組織の傍に交換のための生産の組織を成立させたのである。この二つの組織は、一たび並置されるや、当然お互に作用を及ぼし始める。』したがって封建制衰退の要因は、この両者の対立Ⅱ抗争とりわけ後者の前者にたいする「衝擊」を生むとき『創造的な力でありえた』長距離商業に求められねばならない、と。

(白杉庄一郎教授の所説)

白杉教授は主としてイギリスの事例に拠られながら、とくに十三世紀の賦役体制の地理的偏在すなわち東南部の古典型巨大所領における賦役の優越と西北部での貨幣地代の支配的存在(本稿第二節参照)という対照的現象を念頭に、次のように独特の『論理』を展開されるのである。

『私は、問題の現象の原因として一層重視されなければならないのは、穀物輸出の増大ではないかと思う。けだし、典型的莊園の多かった中部および南部イングランドは穀作農業を主とする地域であり、その欠如していた西部イングランドその他の辺境地方は牧畜を主とする地域であったからである。……輸出貿易を通じて封建經濟が商品經濟化する場合、穀作農業を主とするものが牧羊を主とするものと異つて賦役制とむすびつく傾向をもつたであろうことは容易に推測しうるところである。けだし穀物生産は牧羊に比してはるかに多くの労働力を必要とするからである。そして、これが十三世紀に典型的莊園の多かったイングランドの中部および南部の穀作地帯においては穀物輸出の増大が、賦役制の復活ないし強化にみちびいていったのにたいし、非莊園的所領の多かった西部その他の辺境の牧畜地帯においては羊毛輸出の増大が貨幣地代の形成にみちびいていった最も根本的な原因ではなかったかと考えられる。』(同「資本主義成立史の原型」第一分冊二四頁)。

かくてイギリス農奴制の終熄に導くプリムム・モービルは、当時すぐれて『近代社会の本質的特徴たる世界的性格』をとって現れる羊毛の輸出貿易にあると思ひ込まれた教授はさらに、『大規模所領においても、商業はやがて結局はマナー制度の崩壊とヨーマンリーの成立とを媒介する客觀的条件となるものではないか。すなわち、商業資本はまずマナー制度の成長と並行し、かつこれを掩護しつつ成長の途をたどるのであるが、かくして成長した商業資本は漸次マナー制度を變質せしめてゆく、いいかえればマナーおよびその領主が商業化して市場と密接な關係をもつようになる、そしてこのことがやがてマナー制度の解消とヨーマンの成立とにみちびいてゆく。』(四二頁)

『要するに、マナー制度の解消とヨーマンリーの成立の結果として商業資本が一時衰退したからといって、商業資本がそれらに対してはじめから保守的反動的な性格をもつたと断定するのは、あやまりである。封建的なものも、それはそれで、また、ある一定の段階までは歴史的進歩的な役割をはたしたのである。……私は、近代資本主義の前提としての農奴解放の客觀的条件のすくなくとも一つとして商業とくに——羊毛および毛織物の輸出を中軸とする——外国貿易の發展ということが考えられねばならぬとの見解を堅持する。』(四八頁)



## II イングランドにみるマナー体制の変遷と十三世紀

右に提示した論点に触れるに先立って、まず便宜上イングランドにおけるマナー体制〔Ⅱ賦役体制〕<sup>1)</sup>のとする複雑な発展過程を概観し、その特殊に、イギリス的な様相を描きながらあらかじめ、われわれの十三世紀のマナーにたいする分析視角を明かにしておきたい。

(1) 「マナーmanor」概念の用法にはほぼ広狭二様の立場がある。その一は、イギリスの歴史学において最も頻繁に用いられる仕方であり、領主直営地を基幹とする農奴賦役の広汎な利用の体系を意味するものである。この点からすれば、ドイツ経済史学の概念である「ヴィリカチオン体制 Villikationsystem」に相応する封建的土地所有の古典的体制〔Ⅱ段階〕を指示する概念として理解できるであろう。したがってコズミンスキーの著名な類型の設定もこのような概念規定を基準として与えられたものと考えられるであろう。第二には、「マナー」を封建的土地所有一般と等置して使用する用法がみられる。この場合、封建地代が賦役の形態を支配的にとるか或いはそれが現物ないし貨幣の形態をとるかといった問題、およびこれに照応する生産者の社会的存在形態の如何には差し当り直接関連をもたない。

本小論ではこの「マナー」概念をイギリス史学の通例的な用法に拠って用いることにする。この点、例えば『マナーの解体』(The Break-up of the Manor)という標題のもとに、イギリス経済史の標準的概説書 E. Lipson, The Economic History of England, Vol. I, 10th ed., が展開する叙述を参照せたい。なお封建的土地所有一般を示す場合にしばしば『estate』なる語が用いられるのであるが、この言葉が単に「財産」「農場」等の近代用語例をもつことと共に、「マナー」にもまた何らかの地主的所有地一般を包括する無規定的な用例のあることも併せて記憶されねばならない。

イングランドにおける封建的土地所有の発展過程の具有する基本的特質はその特異な地代形態の推移のうちに集約

的に表示される。<sup>2)</sup> すなわちここでは封建地代の古典的形態たる労働地代が、フランス等に見出されるように先ず第二形態としての生産物地代によって継承されることなく、直接貨幣地代へと形態転化を遂げつつ解消するのである。

右の特徴的な地代形態の発展過程を担うマナー体制の歴史については、旧来の研究史の指示するところによれば、マナーのとする古典的構成の本格的成立は、一般にかのノルマン王ウィリアムの手にかかる一〇八六年の全国的検地(Doomesday Survey)を劃期として導かれたと考えられ、<sup>3)</sup> その漸進的発展は十三世紀において全面的に開花し、<sup>4)</sup> いうところのマナー体制の『最盛期』(ヴィノグラドフ)を現出するものと解されてきた。そしてさらにマナー体制の解体を告示すべき農民負担の賦役から貨幣地代への移行、「賦役の金納化」(commutation)の進展は、ほぼ十四世紀中葉にみる黒死病の大流行および一三八一年全国的規模において展開された大農民一揆(Great Revolt)を契機として、<sup>5)</sup> 殊にそれと併行して急速に伸長する「貨幣経済」の効果として、強力に遂行されたと説かれたのである。

(2) この問題については、イギリスが他のヨーロッパ諸国に先行して早期に資本制生産の発展を招来しえた前提条件を説明しようとする分析視角から岡田与好氏が鋭い指示に富む総括的な展望を加えておられるので、立入った分析は本小論ではひとまず割愛することにおきたい。同氏「イギリス・マナー崩壊の基本的特質——農業における資本主義形成の歴史的前提」(東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第五卷第二号・第三号所収)その他、問題の所在を明示した高橋幸八郎氏の諸論稿、とくに「封建社会における基本的矛盾について」(歴史学研究会編『世界史の基本法則』一九四九年)等参照。

(3) イギリス・マナーの古典的構成については、曾ってイギリスにおける『古典理論』の創始者の一人であるウィリアム・メイトランドが次のような周到な言葉を前置きとして著名な一文を綴っている。『マナーの定義を求めることは、得られる筈のないものを欲することである。けれども、なわかれわれは典型的なマナーの構図を描き出すことは可能であるし、またこれを描きえたとき、はじめてこの典型からの偏向についても論じることができよう。』と。かくて、マナーの包蔵する構造上の、したがってまたその再生産機構の上での豊富なヴァリエティの存在を意識しつつ彼れはいう。

『(一)典型的マナーは地理的には村落と一致する。マナーの領主はまた同時に村落の領主である。……人々の集団は、一方からすれば《Villata》、すなわち村落員の社会であるが、他方では借地農民の集団でもある。……(二)マナーにおいて人々が居住し耕作する土地は三つの部分に区別される。まず領主は直営地を有する、……次いで自由保有により領主から保有する土地があり、また不自由ないし慣習的保有により領主から保有する土地がある。マナーの土地のうち、耕作される部分は通常二つまたは三つの大きな開放耕地にあり、領主、自由保有農民・慣習的保有農民等のもつ地条が混在している。次ぎにマナーには放牧地があり、その大部分は領主が直接に保有し、借地農民はそこに共同権(right of commons)をもつ。次いでマナーは経済的一単位をなす。つまり、そのマナーの領主直営地は、借地農民の義務たる賦役によりその大部分の耕作が行われる。(三)領主が大領主であり、数個のマナーをもつ場合にも、各マナーの領主経営は個別的に行われる。すなわち、各マナーにはそれぞれのベイルフ(bailiff)やリーヴ(reeve)が一般に存在する。(四)最後に、領主はマナーに裁判所を設置する。……』(F. Pollock and F. Maitland, *History of English Law*. 2nd ed. 1952, Vol. I, pp. 596—597)

(4) P. Vinogradoff, *The Growth of the Manor*. 2nd ed. 1951. pp. 291 seq. その他。

(5) 「金納化」に関するこうした理解の仕方は、とりわけ T. W. Page, *The End of Villainage in England*. Publications of American Economic Association, 3rd Series, Vol. I, No. 2. 1900. esp. pp. 39, 47 etc.; W. Cunningham, *Growth of English Industry and Commerce*. 5th. ed. 1915, Vol. I, esp. pp. 379, 396 etc.; ⑥叙述 著者の J. E. T. Rogers, *A History of Agriculture and Prices in England*. Vol. I, 1866. pp. 81—82; ditto, *Six Centuries of Work and Wages*. 1884. pp. 218—219, 254 等にその典型的な——たとえディテイルにおいて多くの相異点をはらみ且つ対立的でさえあったが——提示を求めることができる。この点については、矢口孝次郎「イギリス封建社会経済史」第五章第一節、小松芳喬「封建英国とその崩壊過程」第一論文「マナー研究史概要」等の簡潔な研究史への省察を参照のこと。

しかしながら新たに提供されたイギリス・マナーに関する実証的研究の諸成果は、旧来の研究史が提示した既成のシエーマにたいしてつぎと有力な批判を提出し、その全面的改訂を鋭く要求したのであった。その詳細についてはここで閑説する余裕をもたないが、その新しい実証史学の水準が示したところに基づけば、当面の問題視角に即

してわれわれはおおよそ次のように整理して理解することができよう。

〔一〕 新たに提供された有力な事実の第一は、イギリスにおけるマナー体制が十三世紀にその『最盛期』を体験するに先立って、一旦金納化への顕著な傾向を有し、ときには貨幣地代が農民負担の基軸的部分さえ構成しえた一時期を經過していることであろう。この点、旧くアシュレイ W. J. Ashley によつて既に僅かながら探り当てられていたのであるが、後に一九三七年と一九五三年とに公表されたマイカル・ポスタン M. Michael Postan による二つの研究成果が問題の事態を明瞭に説明する。すなわち、ポスタンはそれらの論稿において豊富なマナー史料を駆使しつゝ、十二世紀が著しい「金納化」傾向をはらみ多くの所領で——巨大教会領でさえ——貨幣地代が支配的存在をとつていたことを明かにしているのである。例えば一一八九年、グラストンベリー修道院に所属するマナー、グリトルトン Gritleton (Wiltshire) では全賦役の消滅が見出されるし、グロスターシャー Gloucestershire のトリニティ修道院管下のマナー、ミンチンハムプトン Minchinhampton では、ヘンリー一世の初年『virgate ad opus』が二六、『virgate ad censum』が九であったが、ヘンリー二世の初年には前者は九に減少し、約二〇年後にはこのマナーの全農民保有は貨幣地代によつてなされている。<sup>9)</sup>

右の二つの事例は決して局部的現象ではなく、むしろかなり一般的な傾向であつたと考えるにたる幾多の史実が存在しているのである。われわれは第十二世紀を「金納化」の著しい進行と直営地経営の凋落および貨幣負担農民層『censuarii』——この生成が当時開墾と極めて緊密な関連をもつていた事実をも想起すべきである——あるいはまた『firmarii』の臺頭の時期、総じて『地代莊園 Rentengrundherrschaft』的構成の端初的發展の世紀として特徴づけることができる。<sup>11)</sup>

- (9) W. J. Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*. Vol. I. Pt. I. 1901. pp. 22 seq. 彼  
 のいう「*liberi tenentes*」すなわち自由保有農民の顯著な發生を指示している。
- (10) M.M. Postan, *The Chronology of Labour Services*. *Transaction of the Royal Historical Society*, 4th Series,  
 Vol. XX. 1946, ditto, *Glastonbury Estates in the 12th Century*; Ec.H.R. 2nd. Series, Vol. V, No.3, 1953.
- (8) Postan, Ec.H.R. pp. 364-365. なおホムタンは「この小論におおむねとくに犁隊 (plough-team) の数、羊の頭数、  
 一の評価額、地代量等の指標につきそれぞれ統計表を提示し、ヘンリー一世以降当該所領が示す構造転換の具体的な様相を描  
 写する。

(6) Postan, TRHS. p.183. なお、この論文の第二節に記載された夥しい事例を参照。

(9) «*censuarii*»階層の生成と開墾との関連性を示唆する記述は、とてつ E. Miller, *The Abbey and Bishopric of Ely*.  
 1951. pp. 93-108. をみよ。その他 N. Neilson, *The Economic Conditions on the Manors of Ramsey Abbey*,  
 1898. pp.25-28. 1946 D.C. Douglas, *Social Structure of Medieval East Anglia*; Oxford Studies in Legal and  
*Social History*. Vol. ix, pp.82 seq. 参考。

(11) 封建的土地所有の構造転換『ヴァイリカチオン体制→純粹Ⅱ地代荘園』の問題提示は主としてドイツ社会経済史学の成  
 果である。例えば G. von Below, *Geschichte der deutschen Landwirtschaft des Mittelalters in ihren Grundzügen*.  
 hrsg. von F. Lütge. 1937. S.73 usw. なお右の諸成果に依拠しつつそれを封建地代形態の発展との関連において、社会的  
 生産力の推進主体たる農民層の存在形態の発展過程として把握を企図された、高橋幸八郎教授の雄篇『いわゆる農奴解放につ  
 いて』(近代社会成立史論)第二篇)の論述を参照。

(二) 第二の新しい論点は周知のコズミンスキの研究から与えられたものである。その研究の齎らす主要な帰結は、  
 かつて十三世紀に冠せられてきた『マナーの最盛期』なる呼称にたいし重大な制約を加えることになった。彼れは従  
 来マナー内部の史料を基礎として遂行されてきた研究方法がこの時期における賦役体制の発展を誇大に提示するとい  
 う不可避免的な欠陥をもつ事実を指摘し、自らは一二七九—一八〇年に作成された《*Hundred Rolls*》を基礎史料とし、  
 13)

おらに『Inquisitiones post mortem』をも援用することにより、かつて探り当てられることのなかった全く新しい歴史の局面を明示することに成功したのである。いまその主要な論点を挙げれば、はば次のとおりである。

(一) 十三世紀のイングランド全土を通観するところ、マナーの形態について極めて豊富な多様性を検出することができるが、とりわけその所領構造において「古典的」構成[「領主直営地・農奴保有地 land in villeinage」]の支配的な成熟を示した所領(典型的マナー)の存在は、旧説の説くところとは異なり極めて大巾に局限されるべきであって、むしろ「自由保有」・「貨幣地代」等の『非マナー的要素』から特徴的に構成されている「非荘園型所領」(non-manorial estate)が、これと並行して初発から既に抜き難い存在を示していることも充分考慮されねばならない。(二) マナーにみられる右の二つの型についてその地理的分布の状況をみるならば、かつて H・L・グレイ Howard L. Gray が十四世紀について示したところと同じく、<sup>15)</sup> イングランド東南部には「古典型」たる賦役制マナーの特徴的な発展が認められ、逆に「非荘園型」発展の立地は西北部とすることができるとのこと。このことはまた、最も商品流通と都市市場の発達した地域で、とくに、巨大教会領マナーで、新たな賦役体制の成熟 II 『封建的反動』(feudal reaction)が見出され、却って商品市場から遠く隔てられた地方で、ことに中小所領で、貨幣地代が発達しているという『逆説的』な事態を意味するものである。従って十三世紀には、このような仕方では、賦役も貨幣地代ともに発展した。<sup>16)</sup>

(12) Kosminsky, Services and Money Rents in the 13th Century.

(13) Kosminsky, The Hundred Rolls of 1279—80 as a Source for English Agrarian History. translated by M.M. Postan, Ec.H.R., Vol. III, No. 1 1931. esp. pp.19 seq. <sup>16)</sup> ditto, Feudal Rent in England. Past & Present. No. 7. pp. 18—19.

(14) コズミンスキー以前においてもマナー体制の多様性については若干の重要な研究が行われている。例えば、デインロウ Danelaw に関するフランク・ステントン Frank M. Stenton の研究「Types of Manorial Structure in the Northern Danelaw: Oxford Studies in Legal and Social History Vol. ii. 1910 および、七つのメルクマールを設定し——すなわち(一)マナーの組織とその村落にたいする関連性(二)マナー内部における社会層(三)土地保有の通例的単位(四)開墾の進展(五)地代と賦役(六)直営地(七)裁判組織——これを基準とするマナー諸形態の「型」の把握を提唱したN・ニールソン N. Neilson の論稿「English Manorial Forms. American Historical Review, Vol. xxxiv, 1929. がそれである。なお、こうしたマナーの諸形態への展望については、N. Neilson, Medieval Agrarian Society in its Prime: England; Camb. Econ. Hist. Vol. I. に便利な叙述を見出す。

(15) H.L. Gray, The Commutation of Villein Services in England before the Black Death. English Historical Review, Vol. xxix, No. CXVI, 1914. この論稿でグレイはボストンからグロスターを貫く線を想定し、十四世紀前半にあっては既にこの線から北西には賦役の存在は殆んど見出せず、一方その南東の地域では当時ケントを除くすべての地方で賦役の存在が見とめられ、ことに若干の地方では依然として支配的に現われている、としている(ibid. 早稲田大学経済史学会編「英吉利経済史研究資料」(増補改訂版)一〇一頁以下、とくに一二六頁)。

(16) この点 Postan, TRHS. esp. pp. 189-193 を参照。

以上、新たに研究史に加えられた重要な二つの成果を綜合するならば、われわれはイングランドにおける賦役の変遷過程を次のような形で理解しうるであろう。すなわち、十一世紀以前における賦役の支配的存在は十二世紀の「金納化」の特徵的進行という事態によって継承され、ついで十三世紀において再び賦役の部分<sup>17)</sup>的復帰が導かれる、と。そしてこうした変遷過程の内部にさらに探りを入れるとき、十三世紀にみる賦役体制の再出・拡大という現象が、とりわけ「市場のための生産」という新たな課題を担って導かれたという注目すべき事実に接することができるのである。この点を顧慮するならば、十三世紀において『最盛期』を現出した特定所領の農奴制Ⅱ賦役体制の基本的性格は到

底<sup>19</sup>、単純にヴィリカチオン体制の成熟した形態として把握しえざる複雑な構造をとるものと考えねばならぬだろう。そこにはポスタンも語るごとく、十六世紀のオストリエルベ地方に生成する『再版農奴制』Ⅱ「グーツヘルシャフト Gutscherrschaft」<sup>20</sup>や<sup>20</sup>えも想起せしむべき側面すら明瞭に指摘できるのである。

こうした十三世紀のイギリス巨大所領の特徴的な発展傾向Ⅱ『封建的反動』に関し、コズミンスキーは総括的に次のように含蓄ある言葉を述べるのである。

『事実、この時期のイギリス農村における支配的な傾向は貨幣地代の発展であり、十三世紀には既に封建地代の主要な形態となった。しかし、それと並行して賦役もまた残存し所によっては発展しさえしたのである。農民経済における交換の発達、それが直接に地方市場に役立とうと仲買商人を経てヨリ遠隔の市場に資そうとも、貨幣地代の発展に導く。他方、領主経済における交換の発達、賦役の発展に結果する。……一般に不自由農民の上にその所領地を効果的に確立・維持してきたこれら大封建所領において賦役が強固に保持されたといつてよからう。それらの所領で、の発達する交換のための生産が齎らず明かな帰結は、賦役のさらに一層の発展であつた。……』

約言するならば、封建制は自己を確立することにおいて最も成功しなかつた地方で、またそうした所領で、最も急速かつ容易に解体したのである。しかし大貴族領や教会領では、それは牢固として維持されたばかりでなく、さらに交換経済の発展により、新たな力さえも導き出したのである。<sup>21</sup>』

(17) イングランドにおいては、既に初巻から「古典的」構成をとらぬ幾多のマナーが存在する事実を忘れてはならない。例え<sup>22</sup> Douglas, op. cit. Chap. I, 等参照。

(18) Postan, op. cit. pp. 189 seq. を参照のこと。なおポスタンは十三世紀の賦役制再出の現象を不当に一般化して考え<sup>23</sup>てゐるとしてコズミンスキーの批判を浴びてゐる。Kosminsky, Feudal Rent in England, pp. 18-19.



(19) Postan, op. cit. pp. 192 seq. その他 Dobb, op. cit. pp. 38—41.

(20) この問題に関する本邦の主要な研究成果として、差しあたり、松田智雄教授の諸研究が挙げられねばならない。例えば、「ドイツ産業資本の形成と保護主義経済理論(上)」(潮流講座経済学全集第一部。同編著「近代社会の形成」第五章『土地所有と産業資本』として再版)、「エンカー経営の成立と『中間層』農民」(『歴史評論』一九四八年二月)、等々。

(21) Kemsinsky, Services and Money Rents. pp. 43—45. (傍点は引用者)

右にみるごとく、今日の発達した実証史学の水準が明かにするところによれば、旧来の経済史学が十三世紀にたいして与えてきた『マナーの最盛期』という時代規定は恐らくは当を失した見解とすべきである。われわれが十三世紀のイングランドについて検証しうる基本的様相は、賦役ではなくむしろ貨幣地代の支配的伸長という事実にはかならない。換言すれば、当時イギリス封建制の基本的な構成は「ヴィリカチオン体制」から貨幣地代に基づく「純粹地代莊園 reine- und Rentengrundschaft」へと特徴的な構造転換を果しつつあったのである。しかしながら注目すべきは、こうした事態の進展と相い拮抗しつつ、また局部的ながらも賦役体制の復活が一部巨大所領においてまさに反動的に推進されるという事実である。すなわち特定の巨大所領、就中イングランド東・南部——都市市場の発展によって特徴づけられる先進地帯——の大教会領において「市場のための生産」という新たな課題を担う賦役体制の発展が遂行されつつあったのである。

かくて、十三世紀とそこに見出される発達した賦役体制にたいするわれわれの基礎視点は旧来の通説とは相容れざる方向において指定されねばならない。これを要するに、それはかつて十九世紀の歴史学が提唱したマナーの古典的時期ではなく、むしろこの世紀を特徴づけるものは却って貨幣地代とすぐれて「農奴主的」な商品生産の体系として現われる賦役体制の再版形態であり、両者の織りなす二律背反的な発展なのである。<sup>22)</sup>

〔エリー修道院の収入一覧〕

	1086	1171—2	1256—7	1298—9
	(£)	(£)	(£)	(£)
Rent Income :				
1. Customary Rent	—	—	610	630
2. Sale of works	—	—	105	170
3. Contractual rents	—	—	345	900
Total Rent Income	—	—	1060	1700
Agricultural income	—	—	1160	1400
Income from courts. etc.	—	—	80	400
Total gross income	484	950	2300	3500
Expenses	—	30	370	950
Net incomes	484	920	1930	2550

(Miller, op. cit. p.94)

いわゆる『最盛期』にみるイギリス・マナーの流通機構

六四

われわれが本小論における論述の対象として設定した十三世紀の巨大所領はかかるディナーミッシュな歴史過程の所産として把握せられるべき性格を担うものである。

(22) 岡田興好氏も明瞭に指示されるように(同氏前掲稿(一)七一—二頁)、かかる十三世紀の二律背反は「荘園的」所領、「非荘園的」所領といった立地を基礎として空間的に遊離して現われるばかりではない。一層重要な事実は、ダグラスやミラーの研究が明示することく、賦役体制の伸長を遂げるエリー修道院領等の大教会領でさえ貨幣地代の明瞭な併行的発展の真相を見出しうることである。

この点の明かな例証は上の表から得られるであらう。

その他、Neilson, *Manors of Ramsey Abbey* におけるウィストウ・ナー Wistowe (Hants.) の分析をみよ (esp. *Ibid.* pp.66 seq.)

### 三 イギリス・マナーの運搬賦役

前節において十三世紀の歴史が示す特徴的事実の一としてわれわれは商品市場との結合の成果として与えられた賦役体制の再出強強化、いいかえれば「農奴主的商品生産」ともいうべき再生産機構をとる巨大マナーの発展を指摘した。「序説」の提示する要請に基づき、この種のマナーの内部構造に探りを入れることが次いでわれわれに課せられた当面の問題となるのであるが、その再生産体系の全機構的検証は

別の機会に譲り、ここではとくに直営地生産と市場との結合を媒介するマナーの流通機構が特徴的に形づくる内部構造を把握すべく一つの局面をとらえ、これを導きの糸とすることにより問題の核心にアプローチしてゆきたい。

(1) 拙稿では差し当り論点をここに限定することになるが、われわれが現在閲読しうる若干の個別研究は十三世紀にみる封建的反動の実相を明示する。いま論述の背後に廻ることとなった局面、直営地経営自体について示される反動的諸相はほほ次のようなものである。まず第一に賦役体制の主体的条件として賦役労働の増徴が挙げられる。「週賦役」(week-work)日数の増加・自由保有農民の農奴身分への再編成・「賦役保有地」(tenure ad opus)の拡大・《cottaril》・《bordarii》にたいする賦役徴集、等々。第二には、その客体的条件たる直営地の質的・量的充実の事実が指摘される。農民ないし小領主の定期小作地とされてきた直営地の回収・開墾による拡大・死亡農民および逃散農民の保有地の直営地化・直営地条の結合と綜劃・共同地の収奪と綜劃、等々。Neilson, *Manors of Ramsey Abbey*, pp. 22—63.; M. Morgan, *English Lands of the Abbey of Bec*, pp. 74—87.; Miller, *op. cit.* pp. 87—103.; H. P. R. Finberg, *Tavistock Abbey*, 1951, pp. 80 seq. etc. 等。他' F. G. Davenport, *The Economic Development of a Norfolk Manor*, 1906; N. S. B. & E. C. Gras, *The Economic and Social History of an English Village*, 1930; E. Robo, *Medieval Farnham*, 1933. etc.

右の視角から当面論述の焦点に据えられるところはイギリス・マナーにおける農民賦役の一形態として強制される『運搬賦役 *carriagium, carriage service*』である。この種の賦役はこれまで比較的経済史家の注目を惹くことなく通常歴史研究の片隅みに押しやられ、かの N. S. B. グラスにおいて唯一の例外を見出すとはいえず、一つの研究的盲点として不当に没却されてきた。しかしこうした研究史の傾向は、恐らくはマナー体制をそれ自体孤立化した「自然経済」的小宇宙として理解してきた旧来のマナー研究の動向から究局において規定されているともいえるよう。

(2) N. S. B. Gras, *Evolution of the English Corn Market*, 1915, Chapter I.

ともあれ十三世紀のイギリス・マナーの示す『封建的反動』の諸相を念頭におくならば、『運搬賦役』の問題は決

してネグリジブルなものではないのである。それどころか、この種の賦役が「反動期」の所領経済の上に果しえた機能の検討からわれわれは商品流通と封建的土地所有との相互関係を確認するための鍵ともいふべき数々の貴重な示唆を得ることができるのである。この点については主に次節以下の主題とされるはずである。われわれはまず運搬賦役の実態について簡単な素描を行うことから始めよう。

# (一) 史料に示される運搬賦役

【史料一】 チチェスター Chichester の僧正領 (bishopric) に所属するサセックス Sussex のマナー、アムバーレイ Amberley に関して十三世紀後半に作成をみた「慣例集」(customal) は当該マナーに属する自由保有農民、農奴等の負担すべき各称の義務を記録している。この史料に示された「農奴」の一部を掲げれば次のとおりである。

『William Pulayn と William Almer は一ヤードランドを保有し、聖トーマスの祝日に一五片、ラマスに森林料二片、聖トーマス日に共有地料四分の一片、復活祭に二羽の牝鶏と二〇ケの卵を上納すべし。……彼らは年間クリスマス・復活節・聖霊降臨節の三週を除く毎週、週に三日すなわち月曜日・水曜日・金曜日に賦役を行うべし。……必要とあれば……彼らは小麦のためニエイカーの犁耕と耙耕をなし、これにつき六日の賦役を行う。彼らは燕麦のためにニエイカーの犁耕を行い、耙耕は免除される。その賦役は六日間。……彼らは自己の役畜を持って二日の《boon-work》たる犁耕に出なければならぬ。一日は小麦、他の一日は燕麦のためにそれぞれ当てられる。各人は一人の男を伴ない食事を供されて二日の《boon-work》たる收穫労働を行うべきこと。……彼らは牧草地において二人の男と共に領主の秣を必要な量だけ刈らねばならぬ。……賦役日にあっては彼らは終日秣を乾し熊手にてかき集め

それを車で運ばねばならない。(中略)彼らは、パン・ブドウ酒・麦酒・肉・魚、その他領主の命する一切のものを馬の背に<sup>て</sup> Prestone, Hanfeld, Shorham, Ferring, Aldyngbourne, Chichester, Petteworth, Newbridge に赴かねばならない。それは賦役一日に相当する。……もし Dorlyngge に何らかのものを送る必要があれば、彼らは賦役二日が免除され二片が与えられる。また London に行く場合には彼らは賦役三日を許され四片を受けとる。…』<sup>4)</sup>

【史料二】 同じチチェスターのマナーであるケイカム Cakelham (Sussex) について作成された《custumal》もヴィレインに課せられた運搬賦役について次のように規定している。

『ヴィレイン—— Roger de Suthcote は半ハイドを保有し年間一三志四片を上<sup>に</sup>定められた二期に亘り上納すべきこと。〔彼れは〕賦役が行われるときは毎週土曜日と祭日を除きこれを行う。(中略)夏期には必要とあれば粗朶を車二台分 Aldyngbourne から運搬すべきこと。これについては賦役四日が免除される。……彼れは土曜・日曜の両日チチェスターまで荷物を運ぶべきこと。もし他の場所に運ぶ場合には彼れの賦役一日を免除する。必要とあれば、彼れは自己の車を以ってビショップの収穫された穀物を運搬する。……彼れはチチェスターの歳市<sup>フネア</sup>まで麦稈を車で運ぶべきこと。……』

Seman de Suthcote は二分の一ハイドを保有し年間一三志四片を上納すべきこと。ほかに彼れは一〇<sup>1</sup>/<sub>2</sub>エーカー<sup>5)</sup>一ルードを保有し年間五志三片を上納する。彼れは Roger de Suthcote と同様の賦役を行うべきこと。〔後略〕』

(c) W.D.Peckham (ed.), Thirteen Customals of the Sussex Manors of the Bishop of Chichester and other Documents : Sussex Record Society Publication Vol. XXXI, 1925.

(4) *ibid.* pp. 42—43.

(5) *ibid.* pp. 4—5.

以上の二つの史料から窺い知られるように、農奴賦役の内容を規定する《*custumal*》において、犁耕役・収穫労働・乾草作り等の直営地労働とともに運搬賦役はその主要な項目を構成するものとして記録され徴集される性質のものである。したがって、その形成と内容とにおいてマナーの個別的條件を反映しつつさまざまに現われるのであるが、その基本的性格は労働地代の一形態にはかならない。

#### (4) 運搬賦役の諸形態

それ自体封建地代の一形態たる運搬賦役は次の二つの種類に分けられる。

##### I マナー内部の運搬労働

この種の運搬賦役は《*cariagium ad grangium*》あるいは《*cariagium ad grangio ad campum*》等の史料的表现を有するのであるが、これからも知られるとおり、その主要な内容は直営地と領主の穀倉とを直結する運搬に当てられるものである。先の「史料一」にも規定されていたが、この場合の目的は収穫された直営地生産物の集中である。その他、水車への穀物の運搬、木材・燃料等の運搬が挙げられる。

##### II マナー外部への運搬労働

右の場合は生産過程に附随した運搬労働とも考えられるべきものであったが、《*cariagium ad hospitium*》等の史料的表现をもつ第二の形態にあっては極めて重要な問題をわれわれに投げかけるのである。その問題点は最後に総

括することにしたが、われわれが本小論においてとくに分析の対象に据えた運搬賦役は、このようにマナーからの外部を指向するものである。

この種の運搬賦役には経済的な観点よりすればさらに三つの形態を見出すことができる。その一は各所に散在する直営マナー相互間において各種の生産物の移転を目的として行われる賦役である。ある場合には穀物の種子を別のマナーまで送るためであったし、また他の場合には、水車の再建に要する木材が運搬されている。その他、燃料・家畜・麦酒・種羊などが、しばしば運搬賦役によって他のマナーに送付されたのである。第二の形態は *carriagium ad hospitium* ⑦ という史料的表现が明瞭に物語るように、分散する多くの直営地から当該所領の経済的・権力的中心たる少数の *home manor* ⑧ を目的地とするものである。多くの場合それは大領主の直接的な消費を目的とする直営地生産物の送付でもあった。しかし恐らくは若干の史料に明示されるように、そこに存在する領主の大規模な穀倉 (*grange*) への生産物の搬入と蓄蔵のためでもあった筈である。運搬賦役の第三の形態は市場への販売を目的とする直営地生産物の運搬である。これはしばしば史料の上からは特に第二の形態と識別し難いのであるが——同時に、*home manor* ⑨ には往々にして領主が市場開催権を掌握する定期市場が存在したからである——、ときには「史料」⑩ が明記しているように、市場の名称が目的地として示されている事例にも接することができるのである。

かくて *customal* ⑪ の規定に従い、農民は所定の場所まで所定の生産物を——場合によっては運搬すべき物品の名称を掲げていない史料もある。——『領主の意志により』『その欲するときに』運搬すべき賦役を負っていたのである。

(c) N. S. B. Gras, *Corn Market*, pp. 5 seq.; Neilson, *Manors of Ramsey Abbey*, pp. 37 seq.; Finberg, *op. cit.*

p. 82 etc.

(7) この種の賦役の起源については必ずしも明瞭に確認することは困難である(N.S.B. Gras, op. cit. p. 77)。ときには所領経済とは直接関連しない信書の伝達のために用いられた極めて古い賦役から出発したであろう。しかしそれが巨大所領<sup>9</sup>ことに教会領で成立した《food farm system》との関連において発生したという想定もまた可能であった(P. Vinogradoff, Villainage in England, 1892, p. 286; H. S. Bennett, Life on the English Manor, 1937, pp. 108 seq.) など。《food farm system》と「<sup>10</sup>差<sup>11</sup>」の差<sup>12</sup>もだ<sup>13</sup> Miller, op. cit. pp. 77—80; F. W. Maitland, Domesday Book and Beyond, 1897, pp. 62, 146, 235 etc.; Neilson, ibid. pp. 18—22. 等を参照された。

(8) 前掲「史料」<sup>14</sup>「二」参看。その他同じ Peckham (ed), op. cit. にみる《custumal》の記述<sup>15</sup>並びに Finberg, op. cit. p. 83; Davenport, op. cit. p. 37; Neilson, Manors of Ramsey Abbey, pp. 37—39; Vinogradoff, Villainage in England, pp. 285—287; Miller, op. cit. pp. 85—86; Morgan, op. cit. pp. 77—78; N.S.B. Gras, op. cit. pp. 7 seq. なおこの種の運搬賦役をめぐる諸問題の検討もまた次節の課題である。

### (三) 賦役主体

われわれが運搬賦役に関する史料に接するとき、その主体について明瞭に指摘できる一つの事態は、他の耕作労働・収穫労働の場合と同様にそれが「農奴」身分にたいし圧倒的比重において賦課されているという事実である。例えば、さきにチチェスター僧上領下のサセックス・マナーにおける運搬賦役について若干の史料を提供しておいたが、これらの所領について残された十三の《custumal》の分析からわれわれが導きえた結果によれば、十四世紀後半に作成された二つの場合を除外するが(Drungewick: 1353, Stretcham: 1373—4)<sup>16</sup>フリー・ホルダーによって行われた運搬賦役は全く見出すことができなかった。また「コッター」(cottar)等の下層農民に運搬賦役の課せられた規定



は、これら十一のマナーのうちの約半数の五つ (Cakeham, Selsey, Amberley, Preston, Bishopstone) にみられるに過ぎない。またその内容も「ヤードランダー」 (yardlander) のそれと比較すれば極めて簡単なものが多く、その大半はマナー内部に関するもので、木材・肥料の運搬、収穫物の穀倉への搬入等々である。外部への運搬の規定、とくに市場への運搬を規定する言葉は、シェリー・アムバリー・プレストンの三つの《*customal*》でのみ発見されるだけである。これに反して、「ヤードランド」または「半・ヤードランド」を保有するヴィレイン層に課せられた運搬賦役規定は非常に豊富であり、一つの例外を除くすべてのマナーで見出すことができる。しかもその種の賦役が《*boonwork*》としてではなく、「週賦役」乃至はそれへの控除分たる性格をとっていることも逸すべきではない。<sup>11)</sup>

また目を転じてラムゼイ修道院管下の多くのマナーについて示される事例を検討するならば、ここでもほぼ同様な事実を指摘することができる。この所領では「週賦役」とされる二種の運搬賦役が定められている。その一は短距離運搬で、水車や近在の市場を目的地とするものであり、長距離運搬——殆んど《*Extent*》に記載されている——がその第二のものである。後者の目的地は勿論遠隔の大市場である。この負担者の圧倒的部分はヴィレインによって構成されている。彼らは短距離の場合には単独で自己の車や役畜を利用してこれに参じたのであるが、長距離運搬の際にはしばしば彼らが数名のヴィレインと共同してこの賦役を遂行していることは注目すべきである。例えばブラウトン Broughton (Hunts.) では六人のヴィレインが一隊を組織してロンドンまで運搬するよう規定されており、また克蘭フィールド Cranfield (Beds.) やサフィールド Therfield (Herts.) では時に全ヴィレインが同時に、ロンドンやラムゼイまで運搬賦役を行っている。<sup>12)</sup> 他方、コッター等の小土地保有農民への賦課例も見出される。彼らの場合

には通常『背中に担って』(super dorsum) 行なうような小規模の運搬が当てられるのである。<sup>14)</sup>

以上の二つの教会所領の史料はいづれも自由農民層への賦課例を示さないが、自由農民によって運搬賦役の行なわれる事例も例外的には若干見出すことができる。<sup>15)</sup>

総じて運搬賦役の主体が支配的にヴィレイン階層に見出しうる事情は賦役労働の基本的性格を反映するものであり、この点他の直営地生産に充用される種類の賦役と何ら選ぶところはない。また豊富に存在する自由農民(homines)・貨幣支払農民(censuarii)を大きく包摂しえなかったイギリス農奴制に個有な脆弱性はここにも蔽い難く示されるといふべきである。

(9) この問題に関つては Vinogradoff, Villainage, pp. 285 seq. の簡潔な記述をみよ。その他 N. S. B. Gras, op. cit. p. 8.

(10) ここで例外とされるマナーはサセックスのラッカム Rectham である。このマナーは極めて小規模なもので、このマナーの総地代収入は僅かに二六志、ほかに四羽の鶯鳥、五羽の牝鶏、五〇ケの卵があるばかりである。《customal》に記載された農民十二人のうち二〇エイカーを保有する者一名、半ヤードランダー一名、他は二、三エイカーを保有するのみである。運搬賦役の規定はみられない (Peckham (ed.), op. cit. pp. 64—66)。

(11) 同、Peckham, op. cit.

(12) Nelson, Manors of Ramsey Abbey, p. 38.

(13) ibid, p. 39. なおヴィレインによる運搬賦役の共同形態はその他にも若干の例を見ることができる。一三一九年、エリー修道院下のウィスベック・マナー Wisbech (Camsb.) では十四人以上の人々が舟を利用してボストンとリン Lynn (Norfolk) に赴き、麦酒等の商品の販売に従った (Miller, op. cit. p. 86 n.)。

(14) 同、Nelson, op. cit. pp. 37—39.

(15) Miller, op. cit. p. 34 ; J. H. Round, Feudal England, 1909, pp. 32—33.

(16) この問題にたいする秀れた展望は、岡田氏前掲論文(4)、特に六三頁以下に与えられている。また必ずしも同意見とはいえないが、秦玄竜教授の前掲書第一章も同時に参照のこと。後者の論稿については別に述べる機会を得たのでここでは省略しておく。

以上によりわれわれは運搬賦役の内容についてはその大綱を知ることができたが、この種の賦役についての記録が巨大所領における「封建的反動」の進行とはほぼ平行して増加している事実を最後につけ加えておきたい。運搬賦役を規定する最も古い史料は「ドゥムズデイ」以前に遡って求めることができることは事実である。<sup>17)</sup>しかしそれは若干の修道院領について提供されるだけである。こうした史料は十二世紀に入るとともに次第に増加し、十三世紀には今日閲読しうる殆んどのマナー内部の史料において始めて豊富に現れることが確認されている。<sup>18)</sup>このことから運搬賦役が直営地生産物の商品化という所領経済の要請に即して徴集されているという事実を読みとりうるであらう。

(17) ドゥムズデイ以前の運搬賦役を規定する史料として《Ely Inquest》を挙げることができる。他方ヨークシャーについて一〇三〇年に作成された《survey》には運搬賦役に関する規定はない。なおこの点については Vingradoff, *Villainage in England*, p. 289 n.; Gras, *Corn Market*, p. 8; W.H.Stevenson, *Yorkshire Surveys: English Historical Review*, XXVII, pp. 1—25, etc. 等を参照せよ。

(18) N.S.B. Gras, *op. cit.* pp. 8—9, 22—24.

かくてわれわれが運搬賦役の諸々の側面を検討するとき何よりも明かなことは、これもまたその本質において封建地代の最も粗暴な形態たる労働地代たるのみであり、労働地代のもつ凡ゆる規定性の全面的妥当の事実である。

#### 四 運搬賦役と「反動期」の所領経済

これまでわれわれは若干の巨大所領——とくにイングランド東南部の教会領——について示された運搬賦役の存在形態を検討し概略その実態を明かにしてきたが、ここでさらに具体的な事例に照応せしめつつ、二三の問題点を指摘し、「反動期」におけるマナー体制が示す特徴的な再生産構造のうちに運搬賦役の果す逸すべからざる機能について論及することにした。

〔一〕 さきにマナー外部への運搬賦役について触れた際に、その一形態としてかかる運搬労働がしばしばマナー相互間において営まれている事実を指摘しておいた。われわれはまずこの種の運搬賦役の果す重要な機能について語らねばならない。

従来イギリス経済史に関して記るされた幾つかの教科書の敘述はマナーを一村落を基礎とする独立した再生産単位として説明してきた。例えば、かの<sup>1)</sup>W・アシュレーは『経済的観点からすれば、マナーの基本的特質はその自給、自足性であり、その社会的独立性である』と説いており、またチャールス・M・アンドルッズ Charles McLean Andrews も十三世紀のマナー体制と十乃至十一世紀のサクソン・マナーを対比しつつ両者の間には本質的差異は見出しえないとして次のように記している。『そこには同様なマナー生活の自己完結性がある、すなわち経済的な自立性と孤立性、領主と土地保有農民との間に横たわる同じまたは殆んど同じ関係があり、また若干の特殊な例外を除けば、土地占取の同様な体系がある』<sup>2)</sup>と。

しかしマナーを経済的「小宇宙」とみなす見解にたいしては、既にヴィノグラドフが対立的にマナーの集团的運営

を示す諸事例を提示しているが、<sup>3)</sup> グラッスもまたイギリス所領経済の一般的形態をマナー集団の組織的運営に求め『アングロ・サクソン初期を除けば、孤立的なマナーは一般的というよりはむしろ例外的な存在である』<sup>4)</sup>とする見解を明かにしている。<sup>5)</sup>

事実、われわれもイングランド東南部における巨大所領が極めて広範囲に亘って分散した直営マナーを所有し、それらがある程度まで組織化された集団として領主の統一性ある管理のもとにおいている具体例の幾つかを提供することが出来る。

フランス系の外国修道院 (alien priory) たるベック修道院が東南イングランドに所有する夥しいマナーは、ノーファークからウィルトシャーに及ぶ広大な領域に散在しているのであるが、<sup>6)</sup> それらは、少くとも十三世紀の中期には七つの集団に統括されていたのである。<sup>7)</sup> さらにその集団の一つたるオグバーンのベイリフ管区 bailiwick of Ogbourne は二四の直営マナーを包含するのであるが、この同一ベイリフの管理下に立つマナー群すら一州に四ヶ所以上存在しない程の極端な分散度を示し、東はノーファークのレッシングム Lessingham から始まり西はデヴォンシャー Devonshire のクリストウ Christow に及び、北はリンカンシャー Lincolnshire のハイカム Hykeham のマナーに始まって南岸のサセックス・マナーたるプレストン、ホーウ Hooe にいたる中間の地帯に点在している。<sup>8)</sup>

また著名なラムゼイ修道院のマナーに関しても事情は殆んど同じである。すなわち《Domesday Book》の語るところによれば、修道院に所属するマナーはハンティンドンシャー Huntingdonshire に二四、ケムブリッジシャーに十三、ハートファードシャー Hertfordshire に一、サフォーク Suffolk に一、ベドフォードシャー Bedfordshire に九、ノーサムプトンシャー Northamptonshire に七、リンカンシャーに三、ノーファークには一〇の村落にそれ

COUNTY.	HUNDRED.	VILL.	TENANT.	TENEMENT.
Hertford Suffolk Bedford	Two hundreds of Ely	Cetriz	Picot de Gretebrige	3 hides 3 virgates
		Wisbech	Abbot of Ramsey	3 hides less ½ virgate
			Abbot of Ely	2 hides ½ virgate
			Abbot of Ramsey	8 fishers
			Abbot of Crowland	3 fishers
			William de Warenne	6 fishers
			Abbot of Ely	2 fishers
	Odesei	Furrenuelde	Abbot of Ramsey	10 hides 1 virgate
	Fabentga	Lawesselam	Abbot of Ramsey	8 carucates with soke
	Radeburnsoca	Cranfelle	Abbot of Ramsey	10 hides
Northamp- ton	Flichtham	Bertone	Abbot of Ramsey	11 hides
	Bereford	Pechedene	Abbot of Ramsey	10 hides
		Wiboldestune	Abbot of Ramsey	1½ virgates
			Eudo Dapifer	6 hides 3 virgates
			Hugo de Belcamp	½ virgate
			Ricardus, son of Gislebert	2 hides ½ virgate
			The wife of Radulf Taillebois	5½ virgates
	Bicheleswade	Bereford	Nigel de Albingi	9 hides 1 virgate
			Abbot of Ramsey	5 hides
	Clistone	Clistone	Osbern, son of Walter	3 hides
Lincoln			Abbot of Ramsey	1 hide
			Bishop of Lincoln	3 hides ½ virgate
			Eudo, son of Hubert	6½ hides
			Nigel de Albingi	2 hides
			Judith	1 hide
		Sethlindone	Abbot of Ramsey	10 hides
		Holewelle	Abbot of Ramsey	3½ hides
			Abbot of Westminster	6½ hides
		Standon	Abbot of Ramsey	½ hide
			Wife of Radulf Taillebois	2½ hides
Norfolk	Wilibroc	Northampton	Abbot of Ramsey	1 house
		Hala	Abbot of Ramsey	1½ virgates
		Luditune	Abbot of Ramsey	½ hide
		Adelintune	Abbot of Ramsey	½ hide
			S. Peter of Burg	1½ hides
	Pochebroc	Hemintone	Abbot of Ramsey	2½ hides
	Hochelav	Bernewell et	Abbot of Ramsey	6 hides
		Dodintune	King	6 hides 1 virgate
	Wimerley	Wicetone	Abbot of Ramsey	3 hides
		Brachefeld	Abbot of Ramsey	1 house belonging to Wicetone with 5 acres
Norfolk	Clachelose		Judith	Soke of ½ acre
			Judith	3 virgates
		Corninctune	Bishop of Bayeux	3 virgates
			Abbot of Ramsey	1 car 6 bov.
		Cranwelle	Bishop of Lincoln	9 car. 2½ bov.
			Abbot of Ramsey	½ car. prati
		Trichingham	Gislebert de Gand	13½ car.
			Abbot of Ramsey	½ car.
			Gislebert de Gand	1 car.
			Colswain	14 bov. and fraction
Norfolk			Bishop of Durham	5 bov. and fraction
			Cdo	10 bov. and fraction
			Vliuet	5 bov. and fraction
		Hidlingheia	Abbot of Ramsey	2 car.
			William de Warenne	22 acres
			Invas. Hermeri	6 acres
		Winebotsham	Abbot of Ramsey	2 car.
			William de Warenne	1½ car.
			Invas. Hermeri	7 freemen in W. and Stowe. Hermer had commendation and half soke.
				½ car.
Norfolk		Snora	Abbot of Ramsey	A small holding
		Derham		
		Phorham	Abbot of Ramsey	
		Utevelle		
	Fredeburga	Walsoca	Abbot of Ramsey	1 car. 1 fishery
	Dochinga	Broncestra	Abbot of Ramsey	3, (10?) car.
	Smethdune	Rinctede	Abbot of Ramsey	2 car.
	Brodecros	Bruncham	Abbot of Ramsey	A small holding through Roger Bigod

い  
わ  
ゆる  
『最  
盛  
期』  
に  
み  
る  
イ  
ギ  
リ  
ス  
・  
マ  
ナ  
ー  
の  
流  
通  
機  
構

COUNTY.	HUNDRED.	VILL.	TENANT	TENEMENT.
Huntingdon	Hirstingston	Bluntisham	Abbot of Ramsey	1½ hide
		Stivecele	Bishop of Ely	6½ hides
			Abbot of Ramsey	7 hides
			Eustace	1 virgate
		Riptune	Judith	3 hides
		Broctune	Abbot of Ramsey	10 hides
			Abbot of Ramsey	4 hides
		Wistov	his sokemen	5 hides
		Upehude	Abbot of Ramsey	9 hides
		Halliewelle	Abbot of Ramsey	10 hides
		Slepe	Abbot of Ramsey	9 hides
		Hoctune	Abbot of Ramsey	20 hides
	Toselund	Witune	Abbot of Ramsey	7 hides
		Wardebusc	Abbot of Ramsey	10 hides
		Ghellinge	Abbot of Ramsey	5 hides
			Alberic de Ver	5 hides
		Emingeforde	Abbot of Ramsey	18 hides
			by Radulf	1 hide
			Eustace	4 hides
			Alberic de Ver	11 hides
			Radulf	1 hide
		Alia Eminge- forde	Abbot of Ramsey	5 hides
		Upeferde	Abbot of Ramsey	4 hides
			Arnulf Hesding by monks of Cluny	10 hides
Cambridge	Delestun (Leystonestane)		Judith	3 hides
			Eustace	3 hides
		Dellinctune	Abbot of Ramsey	6 hides
		Redinges	Abbot of Ramsey	1 hide
			Abbot of Ramsey	7 hides
			William Engayne	4½ hides
			Eustace	4½ hides
		Bierne	Abbot of Ramsey	4 hides
		Breninctune	Abbot of Ramsey	4 hides
		Westune	Abbot of Ramsey	10 hides
			Eustace	1 hide (soke in Acu- mesberie)
				10 hides
	Normancros	Elintune	Abbot of Ramsey	7½ hides ½ virgate
		Saltrede	Abbot of Ramsey	3 hides ¾ virgates
			Eustace	10 hides
			Judith	½ carucate
			Taini Regis	10 hides
		Adelintune	Abbot of Ramsey	2½ hides
		Lodintune	Abbot of Ramsey	1 hide
		Bron	Abbot of Ramsey	4 hides 1 virgate
			Alan	13 hides
		(Brune)	Picot de Grentebrige	1 hide 3 virgates
			Peter de Valongies	
		Stov	Abbot of Ramsey	2 hides
	Papeword		Alan	1½ virgates
			Harduin de Scalers	3½ virgates
		Gravele	Abbot of Ramsey	5 hides
		Elesworde	Abbot of Ramsey	9 hides 1 virgate 5 acres
			Gislebert de Gand	½ hide less 5 acres
			Harduin de Scalers	1 virgate
		Chenepewelle	Abbot of Ramsey	5 hides
		Bochesworde	Abbot of Ramsey	½ hide
			Alan	1 hide
			Robert Gernoun	3½ hides
			Gislebert de Gand	1 hide 1 virgate
			Harduin de Scalers	4½ hides
	Staplehov	Draitune	Abbot of Ramsey	3 virgates
			Terra Regis	½ hide
			Alan <sup>1</sup>	3 hides
			Alan	4½ hides
			Gislebert de Gand	8 hides 1 virgate
			Picot de Grentebrige	1 hide
		Oure	Abbot of Ramsey	10 hides 3 virgates
			Harduin de Scalers	2 hides 1 virgate
			Picot de Grentebrige	½ hide
			Judith	½ hide
		Burwelle	Abbot of Ramsey	10 hides 1 virgate
			Cetriz	½ hide
	Norestov		Alan	2½ hides
			Alan	1 hide 1 virgate
			Harduin	½ hide
		Gretune	Abbot of Ramsey	8 hides 2½ virgates
			Count Moriton	2½ hides ½ virgate

ぞれ存在している（前掲の表参照）。<sup>9)</sup>

右のような巨大所領の分散的な直営地経営については実に夥しい事例を積み重ねることができるのであるが、<sup>10)</sup> 少くとも十三世紀の大規模な所領乃至中規模のそれにおける支配的な直営地構造は、まさしくグラス等の主張することく、広範な分散形態をとるものである。

- (1) Ashley, op. cit. i. p. 33.
- (2) C.M.Andrews, *The Old English Manor: A Study in English Economic History*. J.Hopkins Univ. Studs. in Hist. & Polit. Scien, Extra Volume XII, 1891. p. 240.
- (3) P. Vinogradoff, *English Society in the 11th Century: Essays in English Medieval History*. 1905. pp.305-320
- (4) N.S.B. Gras, op. cit. p. 10.
- (5) *ibid.* pp. 9-11. なおグラスはかかる「伝統的な見地」は共同体論の誤まった理解から生ずるものとしており『すぐての時代においてつねに「一般的」趨勢は孤立からマナーの相互的結合に赴くものである』（*ibid.* p. 10）とみている。
- (6) M.Morgan, op. cit. pp. 20-21.
- (7) *ibid.* p. 38.
- (8) *ibid.* p. 22. 示された地図参照。
- (9) N.Nelson, *Economic Conditions on the Manors of Ramsey Abbey*. pp. 9-13.
- (10) この点「ダグラス・ヒラー・フィンバークらの個別研究および R. H. Hilton, *The Economic Development of some Leicestershire Estates in the 14th & 15th Centuries* 1947. 等に明かにされたところをよむ。

右の事例が示すような高度な分散度を示すイギリス・マナーの直営地経営についてわれわれが見出しえた事態は、それらの直営地をもつマナーが外界から独立して再生産されたとき事実ではない。それらの直営マナー相互間に運



搬賦役を利用し相互に生産財の分配を果すことによって、領主は多数の分散する直営地をあたかも一つの統一的な生産単位であるかのような関係に編成することを可能ならしめたのである。<sup>11)</sup> われわれは与えられた幾つかの事例のうちに多くの直営地が相互に強い依存性をとりつつ耕作される事実を指摘することができる。

エリー修道院所領について示された一つの事例を掲げてみよう。一二五一年この所領に属するグレイトリッシュェルフィールド Great Shelford (Camb.) について明かにされるところによれば、まず穀物の種子が同一所領のマナーたる五つのマナー【Fen Ditton (Camb.), Littlebury (Ess.), Hadham (Herts.), Balsham (Camb.), Tripflow (Camb.)】から運搬賦役を利用して集められた。また水車の新設、木柵の設置等に要する木材は他の三つのマナー【Balsham, Littlebury, Hadstoke(Ess.)】から同様にして送られている。その他家畜が二つのマナー【Balsham, Little Grandsden (Camb.)】からシェルフールドに送付されたのである。これにたいし、逆にこのマナーからは種羊がバルスハムとハトフィールド Hatfield (Herts.) へ、穀物がバルスハムとフェンディトンへそれぞれ農民の手で運ばれている。<sup>12)</sup>

運搬賦役の果す右の役割はさらに飼料・燃料等についても見出すことができるのであるが、<sup>13)</sup> この事例が明瞭に物語るように少くとも十三世紀のマナーは相互補足的な有機的体系を構成すべく組織化されていたのである。そしてかかる直営地集団を基礎として、販売を目的とする直営地生産物が《home manor》において大量に集積されたことも同時に看過さるべきではない。ウィンチェスター修道院管下のマナー群から各様の生産物がウィンチェスター市におけるウルヴェイ Wolvesey の貯蔵所に送られ、そこで開催された大市場での販売に備えられた事実はその好箇の事例であるが、<sup>14)</sup> 同様な事態はまたタヴィストック修道院、ラムゼイ修道院の所領についても指摘しうるところである。<sup>15)</sup>

直営地群の組織的運営・経済的中心への大量の生産物集中——これらは当該巨大所領をある程度まで組織化された「商品生産」の体系として再編成するための基礎条件であったといえないであらうか。かかる諸条件の成熟を媒介する運搬賦役について、エドワード・ミラーは適切にも『直営所領経済の動脈』であると断じている。<sup>16)</sup>

(11) かくすることにより他方では『food farm system』の効果的な利用も可能であった。そのためにマナー相互間の運搬賦役が利用された事実も挙げることができる。例えばチチェスター修道院所領のプレストン・マナーの『Customal』には「ワインは」ドシヨッフの必要にそなへ何ら賦役を免除されることなくパン・ブドウ酒・麦酒・肉・魚を Busslopeston, Henfeld, Ferryng, Amberle など運ばねばならぬ』(Peckham (ed.), op. cit. p. 81)と規定されている。その他 Miller, op. cit. pp. 83 seq. をみよ。

(12) Miller, op. cit. p. 84n.

(13) Peckham (ed.), op. cit. etc.

(14) N.S.B. Gras, Corn Market. p. 7; N.S.B. & E.C. Gras, An English Village. pp. 10, 18.

(15) タウイストックの所領たるデヴァンシャーの各マナーの農民は肉・塩・魚・穀物・ブドウ酒等々をタウイストックまで運搬する賦役を負っていた (Finberg, op. cit. pp. 82—83)。またラムゼイの所領でに近距離運搬の目的地として最も頻繁に現われる地名はラムゼイ自身であった (Neilson, op. cit. p. 38)。エリー修道院所領のフェンディトン (Canb.) はまたケムブリッジシャー・マナー群の生産物のための集積地であった。例えばシェルフアードの農奴は殆んど毎年穀物をそこに搬入する義務を負っていたが、ある場合には彼らはバルスハムの羊毛や穀物さえもフェンディトンへ運ぶように命ぜられていた (Miller, op. cit. p. 86n)。

(16) Miller, op. cit. p. 84. なおこの点につづいて E. Power, The Wool Trade in English Medieval History. 1941. pp. 24—28 etc. の叙述参看。なおマナー相互間における運搬賦役の効果的な利用のみが齎らす結果とはにわかには断定し難いが、次の事実がこの問題との関連において考慮される必要があらう。すなわち先に挙げたベック修道院領について明かにされたところによれば、とりわけ賦役制的諸関係の現実の様相は地方的な諸条件よりもむしろ領主の管理政策の如何によって一層強く条件づけられている。例えば賦役の徴集方法とその強度については、ウィルトシャーのオグバーン・マナーに見出される事情は、

近在のグラストンベリー所領たるマナーよりは却つて遠く二〇哩以上も離れた同じベックのマナーの場合と酷似している等の事実をみよ (Morgan, op. cit. pp. 81-82)。

〔二〕 十三世紀の巨大所領における直営地生産物の貨幣への実現過程は何よりも市場を指向する運搬賦役の利用によつて基本的<sup>17)</sup>に保証されるのである。

まずここでわれわれが注視せねばならぬ点はマナー相互間における運搬賦役すらこの目的に資したという事実である。マナー相互間における運搬賦役の利用行程は前段において検討したように一方では生産手段の分配を媒介したであらう。しかし史料の上ではしばしば弁別し難いといえ、なおそれが同時に生産物販売という課題のもとに利用された若干の事例を探り当てることができるのである。

幾つかの個別研究の明かにしえたところに依拠すれば、直営地生産物のある部分は所与の所領を構成する直営マナーに近接して存在する中・小の局地的市場において販売されている事実を指摘しうるのである。例えばノーファークのフォーンセット・マナーでは生産物のあるものは、ストラットン Stratton (Norf.)、アスラクトン Aslacton (Norf.) 等々の村落で開催される年期または半年期の「歳市」(fair) または「週市」(weekly market) に搬入された。<sup>18)</sup> ベック所領のマナー、ロウム Combe (Hants.) の《account rolls》はこのマナーの穀物が近在の地方市場・アンドゥヴァ Andover (Hants.) とニューベリー Newbury (Berks.) に、そしてオグバーン・セント・アンドルウ Ogbourne St Andrew (Wils.) の史料は同様にその穀物がマールバラー Marlborough (Wils.) やニューベリーで販売された事実を明示している。<sup>19)</sup> またエリー修道院領を構成するマナー群は同時にしばしば小市場の立地であった。

エリーを始め、バルサム、シップダム Shipdham (Nort.)、ウイスベック、ハトフィールド、ハドストック等々の村落にはエリーの司教が開催権を有する歳市や週市<sup>フリースマーケット</sup>が存在した。そして一二五一年ダウンハム Downham (Camb.)の穀物は販売のためエリーの市場まで運搬された事例が見られたし、ウイスベックのバートン・マナーの羊毛もエリーで販売されるのが通常であった。またウイスベック自体フェンリディットンとともに一つのローカルな穀物市場として可成り多量の商品を買収していたのである。<sup>20)</sup>

(17) マナーの生産物が運搬賦役によって特定の市場に搬入され販売される方法とともにさらに、一つの方法を指摘することができる。それは少数の商人と現金の前貸による特約関係<sup>「atta」</sup>を結び、マナーの生産物を出張してきた買占商人とくに外国商人に一括して直接売り渡す方法である。このような方法は殊に羊毛の販売において特徴的に現われる。例えば一二五四年レスター修道院の羊毛は二人の商人——一人はレスター市の商人、一人はフロレンスの豪商バルディ Bardi の手代——に売ら<sup>はつら</sup>る (Hilton, op. cit. p. 27. その他 N.S.B. & E.C. Gras, op. cit. p. 18. ; Morgan, op. cit. p. 52. ; Power, op. cit. pp. 42—45 等を参照のこと)。なおこの場合種羊の貸付け等の手段を通じて農民の小経営によって生産される羊毛が領主の手に独占的に吸収され、前記の買占商人に売却されている事実も注目しなければならぬ。このような領主による農民の羊毛の一括販売<sup>「collecta」</sup>はしばしば領主と大商人との契約条項に加えられている (Power, op. cit. pp. 44 seq. ; Hilton op. cit. pp. 33, 67—68)。

(81) Davenport, op. cit. p. 37. なお、おそくも十四世紀の初年にはこのディプウェイド Depwade のハンドランド (面積約五〇平方哩) にある一九の村落のうち少くとも五つの村落には週期の市場が存在した (Bloomfield, A History of Norfolk, V, pp. 166, 177, 184, 188, 190, 310, quot. in : Davenport, *ibid.* p. 37n.)。

(61) Morgan, op. cit. p. 49.

(20) Miller, op. cit. pp. 85—86n. 十三世紀は、恐らくこのような局地的な小市場を簇生せしめた時期でもあったろう。メイトランドは、アンジュー王朝時代において「バラ」<sup>「bar」</sup>として位置づけられることのなかった多くの村落から「市場税」 (market toll) が徴集されていた事実を指摘し、それらが往々にして近隣の人々のための穀物の、豆類の、乾草の、家畜のそ

して豚の市場であつたとしてゐるが (ditto, *Domesday Book and Beyond*, p. 193; *Township and Borough*, 1898, p. 40). すでにこの世紀が他方では貨幣地代の著しい伸長をもつて特徴づけられるとすれば、こうした局地市場が領主的貨幣経済よりも却つて農民の小ブルジョア経済の發展を基盤として成立すべき性格のものとするのができよう。また一二二〇年以降タヴィストック修道院がつぎつぎとデヴァンシャーのローカルな小市場の市場権を護得してゆく事実が想起されねばならぬ (Finberg, *op. cit.* p. 198 なお ditto and W.G. Hoskins, *Devonshire Studies*, 1952, facing p. 225 にみるデヴァンシャーの市場分布図参看)。この点についての理論究明は、大塚久雄「資本主義の形成」(弘文堂社会科学講座 IV, VI)に展開されてゐる。なお N. S.B. Gras, *op. cit.* chap. II; Hilton, *op. cit.* を参照。

(三) 商品生産マナーが基本的に接触する市場は右のような小規模の局地的市場ではなかった。大量の賦役労働による生産物はむしろしばしば遠く隔つた都市に存在する巨大市場で、しかもとりわけイングランド東南岸における海港都市乃至それを背景とする商業都市で、販売されるという特徴的な事実を明瞭に看取することができるのである。

『もし領主が船にたいして穀物を買はんとするときは、彼れ (ヴィレイン) は領主の穀物を Seford<sup>21)</sup>まで車をもつて運搬すべきである。』この一文はチチェスター修道院のプレストン・マナーの《*custumal*》に記載されたものであるが、われわれはここにマナーの流通機構のとする基本的様相を余すところなく読みとることができるとすべきである。すなわちチチェスターの修道院は管下のマナーの生産物を運搬賦役の利用により、当時「シンク・ポート」(Cinqve Ports)<sup>23)</sup>の一として隆盛を極めていたサセックスのシーファードにおいて販売し、自らを外国貿易の生産的基礎として機能せしめていた事実がそれである。

右の場合是一个の典型的な例であるが同様な事態は他の巨大所領についても勿論見出すことができる。しかし多くの場合には地方の大都市でも夥しい直営地生産物の販売が行われていることも併せて考察されねばならない。

エリー修道院領のマナーにおいて営まれる生産物販売の様相はこのような事態を明瞭に物語るものである。すなわちマナー外部への運搬賦役について規定する史料が掲げているその目的地には、ケムブリッジ、セントIIエドモンズベリ St. Edmundsbury (Suf.)、ハンティンドン、ハートフォードの名とともに、ノーリッジ、イプスウィッチ Ipswich (Suf.) 等の東海岸貿易の拠点が記載されている。しかしこの所領に所属する各マナーの《custunal》が最も頻繁に示す市場名は、ハル Hull (Yorks.)、ヤーマス Yarmouth (Norf.)、ボストン等とともに対オランダ・対ノールウェイ貿易の有数な拠点を形成していたところのリン Lynn (Norf.) にはかならなかった。そしてしばしばボストンもまたこうした運搬賦役の目的地でありえたのである。<sup>25)</sup>

エリー修道院とはば同様な様相は他の巨大所領についても指摘することができる。例えばフォーンセット・マナーの直営地生産物の主要な部分は東海岸諸港を背景とするノーリッジの市場で販売されたし、<sup>26)</sup> ベック修道院管下のマナーたるブレイクナム Blakenham (Suf.) はイプスウィッチ、レッシングム Lessingham (Norf.) はノーリッジとヤーマス、トゥーティング Tooting (Suf.) とリスリプ Ruislip (Middx.) のマナーはロンドンとそれぞれ恒常的な販売機構を形成していた。また領主のチーズはハムプシャーのコウム、マンクストン Monxton、クワリー Quarley およびウィルトシャーのブリクストンII ディヴァリルの農民たちによって、サザンプトン Southampton (Hants.) の港に運ばれていたことが明かにされている。<sup>27)</sup> そのほかラムゼイ修道院管下のマナーについて与えられた《custunal》の明記している市場名は、ハンティンドン、セントIIイヴス St. Ives (Hunts.)、ケムブリッジ、セントIIエドモンズベリ、セントIIオーバンズ St. Albans (Herts.) 等とともにロンドン、イプスウィッチ、コーチェスター等の海港にたいし運搬賦役が行われたことを明示している。<sup>28)</sup>

- (21) Seford (Seaford) はサセックス南岸にある海港。現在は「漁港に過ぎないが、昔は Dover, Hastings, Hithe, Romney, Sandwich Winchelsea, Rye などの「ハンタ・ギール」の一環を形成していた (D. Macpherson, *Annals of Commerce, Manufactures, Fisheries, and Navigation*. 1808. Vol. IV. App.)。
- (22) Peckham (ed.), op. cit. p. 81. なおチチェスター修道院管下のサセックス・マナーが共通の市場としていた市場は海港ローチェスターの歳市<sup>ノハト</sup>ひまごたひごめ銘記<sup>ノハト</sup>なり<sup>ノハト</sup> (ibid.)。
- (23) 「ハンタ・ギール」についてのもたら L.F. Salzman, *English Trade in the Middle Ages*. 1931, pp. 228, 254—5 etc ; E. Lipson, op. cit. chap. VI. esp. pp. 258, 266, 280—283 ; W. Cunningham, *The Growth of English Industry and Commerce during the Early and Middle Ages*. 5th ed. 1915. pp. 218, 220, 279 etc. 等の叙述をみよ。
- (24) 東南岸の諸港が特に対オランダ・対ノールウェー貿易の拠点となっていた事実は N.J.M. Kerling, *Commercial Relations of Holland and Zealand with England from the Late 13th Century to the Close of the Middle Ages*. 1954; H.C. Darby (ed.), *An Historical Geography of England before 1800* : *Fourteen Studies*. 1951, Chapter VIII. による叙述に明示されている。その他 E. Power, op. cit.
- (25) Miller, op. cit. pp. 85—86.
- (26) Davenport, op. cit. p. 37.
- (27) Morgan, op. cit. pp. 49—50, 77—78.
- (28) N.S.B. Gras, op. cit. pp. 20—21 ; Neilson, op. cit. p. 38. なお東海岸諸港がスコットランドのマナーの生産物をも吸収していた事実も若干明かにされている。その例としてレスター修道院の一部の羊毛が遠くボストンに搬入されていたことを指摘している (Hilton, op. cit. p. 31)。

かくて、われわれは十三世紀の「商品生産」マナーが自己を近在のローカルな中・小の市場よりはむしろ大規模な都市市場に、そしてとりわけ当時イングランドにおける外国貿易の有数な拠点として繁栄を築きつつあった東南岸の諸

港に特徴的に接触せしめ、その間に直営地生産物商品化のための恒常的な販売機構を形成していた事実がほぼ確認できるのである。<sup>29)</sup>そしてかかる事情は、当時『商業の復活』(ピレンヌ)<sup>30)</sup>と呼ばれた商品流通の異常な伸長、そして商品価格の急激な昂騰<sup>31)</sup>により全ヨーロッパ的規模において現出しつつあったいわゆる市場の『好況期』(Hoekonjunktur)等の諸条件を、そのような賦役制販売機構を通じて大市場にたいし大量の商品を投入しえた巨大マナー領主の利益に結果せしめたことを物語るであろう。しかしわれわれがこれまで試みてきた若干の分析にも明かなごとく、かかるマナーの流通機構はそれ自体賦役労働の一形態たる『運搬賦役』を抜き難くその基盤として成立していた事実が何よりもここで正当に直視されねばならない。生産物が商品化される過程において、またその基礎を形づくる散在する直営地群の組織的耕作とその生産物の大量の蓄蔵過程において、つねにその媒介項として機能していたものはかかる運搬賦役であつたはずである。ここにこそ自らをすぐれて農奴主的な商品生産の体系として再編成しえた十三世紀巨大所領の経済構造を理解すべき一つの鍵が存在するのである。

(29) マナーの生産物を支配的に吸収していた十三世紀の大規模市場についてはなお多くの研究を要するのであるが、とくにマナーの生産物が海港市場を特徴的に指向しつつ運搬されている事実は、なお断ち難く支配していた共同体規制から規定された国内市場の狭隘性に対応する歴史現象とみるべきではあるまいか。この点とくに大塚久雄「共同体の基礎理論」(昭和三十年)における論述を参照のこと。

マナーがしばしば接触を試みた各市場の規模についてはさしあたり次の二つの表からある程度の見透しを得るだろう。なお同様の点について Maitland, *Domesday Book and Beyond*, p. 175 所収の《borough aids》に関する表を併せて参照のこと。また Darby, *op. cit.* p. 260, Fig. 43 にみる十四世紀の市場図は貴重である。その他 Figs. 44-47 をも参照されたい。

以上の有数な大海港市場が同時に前期的商人資本の牙城であつたことはいうまでもないが、それとともにその幾つかの市場



[Tallage of 1255]

	marks		marks
London	420	Bristol	45
Lincoln	120	Exeter	36
Winchester	120	Wilton	36
Canterbury	90	Cambridge	36
Worcester	75	Stamford	30
Oxford	75	Gloucester	30
York	66	Hereford	30
Marlborough	45	Colchester	30
Northampton	45	Sudbury	15
Norwich	45	Nottingham	15
Bedford	45	Warwich	20s.

(Darby, op. cit. p. 222)

[Fifteenth upon Seaport Merchants] (1204)

	£	S.	d.
London	836	12	10
Boston	780	15	9
Southampton	712	3	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
Lincoln	656	12	2
Lynn	651	11	6
Hull	344	14	4 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
York	175	8	10
Newcastle	158	5	6
Grimsby	91	15	0 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>
Barton	33	6	9
Immingham	18	15	10 <sup>1</sup> / <sub>2</sub>

(Darby, op. cit. p. 221)

とはほぼ同じ規模を誇るセント・イブスの市場権は、ラムゼイ修道院に (Neilson, op. cit. pp. 17-18; Bland, Brown & Tawney, *English Economic History: Select Documents*, 1914, pp. 158-159) それぞれ帰属していた。前期的資本とマナー領主が共通の利害関係に立っていたことは想像に難くないのであるが、この点に関連して、一二一五年の「大憲章」が度量衡単位の全国的統一・外国商人への差別課税の廃棄を要求条項として掲げていた事実 (N.S.B. Gras, op. cit.; ch. Petit-Dutaillis and G. Lefevre, *Studies and Notes supplementary to Stubbs' Constitutional History*, 1930 etc.)、およびコスミンズキーにより「封建的反動」への農民の抵抗と規定された一二八一年の農民一揆がしばしば巨大都市商人をも襲撃した事実 (Petit-Dutaillis and Lefevre, op. cit.; R. Bird, *The Turbulent London of Richard II*, 1949, etc.) が併せて想起されるべきである。また「金納化」の終局的完成＝貨幣地代の一般的成立と期を同じくして展開される大市場の急激

いわゆる『最盛期』にみるイギリス・マナーの流通機構

権は、巨大マナー領主によつて掌握されていた事実も重視すべきである。すなわちウィンチェスターの市場権はウィンチェスター修道院に (Gras, op. cit.)、ボストンのそれはトニイ、リッチモンド両家に (S. Painter, *Studies in the History of the English Feudal Barony*, 1943, pp. 167-168) ホズン

な興亡・中世商業都市の衰退等 (Cunningham, op. cit.; Postan, *The Fifteenth Century: Revision in Economic History*, Ec.H.R.Vol.IX, No. 2, 1939; Hilton, op. cit. etc) の事象が検討の要がある。

(32) H.Pirenne, *A History of Europe from the Invasions to the XVI Century*. 1939. Book V: *The Formation of the Bourgeoisie*. pp. 201 seq.; ditto, *Economic and Social History of Medieval Europe*. 1936. chapter I: *The Revival of Commerce*.

(33) Lord Beveridge, *The Yield and Price of Corn in the Middle Ages*. Econ. Hist. Vol. I, 1927. in: E.M. Carus-Wilson (ed.), *Essays in Economic History*. 1954. Chap. II; M.Postan & E.E. Rich (ed.), *The Cambridge Economic History of Europe*. Vol. II, *Trade and Industry in The Middle Ages*. 1952. esp. pp. 165 seq. (33) Postan, TRHS, p. 186.

## 五 総 括

われわれが運搬賦役という史家の注目を比較的引かなかった一つの局面を捉えながらこれまで多くの紙巾を費やして述べてきたところを総括するならば、そこにはなお多くの研究を要する問題を数多く含むといえ、おうよそ次のような処理が可能であろう。

問題の焦点は次の一言をもって語りつくすことができる。すなわち十三世紀におけるイギリス、巨大所領の直営生産物は、それ自体封建地代の最も粗暴な一形態たる賦役労働そのものにより、直接市場に搬入され商品化された。したがってかかる事態からわれわれの導きうる結論は一部の経済史家の説くところとは決定的に袂を分たねばならない。ここには封建農民の全労働が時間的にも空間的にも二分され、剰余労働部分は「経済外的強制」の効果として封建領主によって直接に掌握されるという農奴制、「Ⅱ労働地代」の法則性が、生産過程たる直営地耕作と同様にマナーと市場とを媒介する流通機構にたいしても浸透し貫徹しているという事実があるばかりである。またこのことは次の点をわ

れわれに指示するであろう。その一は、かかるマナーの流通機構を通じて商品化され市場に投入される生産物は専ら領主の直接の領有に帰する剰余生産物のみであること。第二に、この場合商品所有者として流通の極点に立ち現われるのは封建領主またはその権能の代行者に限定され、直接生産者は全面的に排除されること。従つてこうした商品流通は労働力の再生産とは全く無縁な形態において展開していること。等々。従つてこの故にこそ、『独立自営農民』<sup>2)</sup>『農民の自由な小土地所有』の範疇の成立を齎らすべき主体的諸条件の成熟にたいしてまさに逆働すべき方向規定性を担いつつ商品流通の発展に対応するマナー体制の再編成〔封建的反動〕は強力に遂行されるのである。

(1) Karl Marx, *Das Kapital*. Bd. III, XII, SS. 840—845. (邦訳「青木文庫」版⑬一二二—一二九頁)なお、かかる關係が他方では前期的資本のための存立基盤を保証すべく機能した事実をも逸すべきではなく。この点、Marx, a. a. O. Bd. I, II S. 93, Bd. III, XX, S. 362—363 (邦訳①一九六頁、⑨四六九—四七〇頁)の叙述および大塚久雄「共同体の基礎理論」四一—四二頁。

(2) ここで商業と商業資本の発展が必然的にマナーを変質せしめ、農奴解放・ヨーマンの発生を媒介する客観的条件として作用したとする白杉教授の主張が想起されるだろう。教授がかかる主張を導くための根拠として挙げられた事実は、羊毛輸出の発展が比較的賦役労働を多く必要としないう牧羊経営を増大させたという一事のみであった。しかしこのこと自体は「金納化の終局的達成を何ら説明しうるものではない。たしかに穀物栽培から牧羊経営への転換は一部の賦役を金納化する結果を伴うであろう。だが同時に明かなことは牧羊経営もまた羊の洗浄・剪毛のために可成りの賦役量が必要とすることである。そして場合によっては特定の穀物生産マナーをも凌ぐ賦役水準を示すこともあり得たのである。一例を掲げれば、一二七五年の《Hundred Rolls》が語るベックのマナーたるオクスフォードシャーのスウィンコム Swyncombe は一つの牧羊マナーであるが、ここでは農民の賦役は他の穀作マナーと同様週三日というベック修道院所領の最高水準を打ち出している (Power, pp. 29—30; Morgan, op. cit. pp. 86—87 and note)。従つて羊毛貿易の伸長を直ちに「金納化」への基礎条件とされる白杉教授の見解は、理論にも史実にも背馳した謬見とすべきである。

かくて十三世紀のイギリス巨大所領は、何らその基本構成を変質せしめることなく、市場に接触し、却って農奴主的「商品生産」ともいふべき再生産方法をとりながら、市場の『好況期』を自己の『最盛期』たらしめたのである。

総じて、封建制下に発展する商品流通は、直ちに封建制にたいする否定的契機でもなければ中世的『農奴解放』のための決定的要因でもないことをわれわれは改めて確認しなければならない。実際、商業の破壊的効果であるかにみえる史的現象は、逆に生産関係内部からするこれへの主体的に能動的対応に他ならない。したがって、商業ないし市場の発展は、歴史的にも論理的にも、つねにその拠って立つ生産事情そのものの規定する形態と展望をとらざるをえないのである。世界史の諸過程が、商業が封建制の崩壊に貢献したと同じく逆にその強化にも作用しえたという「逆説的」現象を豊富に提供するのもまたその故であった。